

第339回 大阪大学臨床栄養研究会 (CNC)

日時：平成25年7月8日(月) 18:30

場所：大阪大学医学部講義棟B講堂

テーマ『結核発症におけるリスク因子；低栄養と生物学的製剤』

結核は、古くは労咳と呼ばれ、死の病気と恐れられていましたが、医療の進歩により、本邦での死亡率は激減しております。しかし、現在でも年間2万人以上の新たな患者が発生しており、残念ながら、大阪府は、結核発生率において、平成3年より全国ワースト1が続いている状況です。何故大阪に多いのか、栄養や最近の生物学的製剤による再活性化に関する新たな知見を含め、

大阪府立呼吸器・アレルギー医療センター 臨床研究部長 松本 智成先生 にお話頂く予定です。多くの方々のご参加をお待ちしております。

講演内容

結核の発生率において、大阪府は2011年においても都道府県の中では20年連続ワースト1であり、政令指定都市では大阪市が40年連続ワースト1であった。結核は、過去の病気と思われるが、まだまだ日本における最大の感染症である。2009年のWHOの推計では、世界中で年間に940万人が新規に結核を発病し、130万人が結核で死亡している。この数字は増大しており結核は再興感染症と呼ばれ、人類史上減った事が無い病気であるといわれている。特にHIV/AIDS、多剤耐性結核(MDR-TB)と超耐性結核(XDR-TB)がその増加の一躍を担っている。結核罹患率も、再び上昇するという不安材料もみられる^{1,2)}。結核病巣といえば免疫が関与し、大阪大学総長をされた山村雄一先生が菌自身ではなく体の免疫反応で結核病巣が作られる事を世界に先駆けて発表された。現在においても結核にはさまざまな医療、医学上の問題点があり、そのうちの一つである結核患者の低栄養状態改善はNST活動の大きな柱となると思われるが残念ながら加算の対象ではない。さらに近年、生物学的製剤が導入されてリウマチなどの免疫疾患の医療が大きく変わったが、有害事象として感染症があり、そのうちの一つである抗TNF製剤による結核は世界的な問題である。今回、いまだ解決すべき問題の多い結核の現状、日本、特に今村、山村先生等の大阪大学が世界に先駆けて行ってきた業績を紹介し³⁾今後の医学研究の発展に何か役立てていただけたら幸いである。

- 1). 松本智成、トピックス 院内感染：日本内科学会雑誌 第97巻 第11号 63-71, 2008
- 2). 松本智成、「結核の現状と最新の治療」日本耳鼻科学会会報 115: 141-150, 2012
- 3). Matsumoto T, et al. *N. Engl. J. Med.*;355(7):740-1, 2006

世話人：抗体医薬臨床応用学寄附講座 田中敏郎

E-mail: ttanak@imed3.med.osaka-u.ac.jp

次回、第340回 CNC は、生体情報科学 木原進士先生のお世話で

平成25年9月9日(月)に開催予定です。